

2026年度
関西学院大学ロースクール
B日程

一般入試（法学未修者）
特性評価型入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論文問題】

問題文を読んで、「設問１」および「設問２」に答えなさい。

〔設問１〕

「論理学の論理」および「説得（レトリック）の論理」とは、それぞれどのようなものであるかについて、問題文の著者の見解を要約しなさい。（５００字程度）

〔設問２〕

問題文の下線部「論理学の形式論理によって結論の真偽は決定できるにもかかわらず、なぜレトリックという別の学問が必要なのだろうか」という問いに対する問題文の著者の見解について、論理学とレトリックの違いを具体的に指摘しながら、説明しなさい。（４００字程度）

問題文

論理学の論理

<論理的であること＝矛盾のないこと>

論理学の根幹をなすのは、「矛盾を排除して無矛盾を維持すること」である。無矛盾とは「Aと非A（Aでないもの）は同時に成立しない」という原理である。論理学の三原則（または思考の三原則）はすべてこの点に関わる。難しそうに聞こえるが、「Aである」と「Aではない」ということが同時には成立しないという、言語のシステムからいっても、また人間の認知の枠組みと常識からいっても「当たり前」のことである。論理学は、「AはAである」、「Aと非Aは同時に成立しない」、「Aであるか、またはAではない（つまりその中間は存在しない）」という三原則を打ち立て、これらに反する場合を矛盾と判断することで命題（主語と述語から成るなんらかの判断を含む文章）の真偽を決定する。

論理学は文と文の関係を「内容」ではなく、その「形式」に注目することによって結論の真偽が判断できる仕組みを考え出した。「内容」を棚上げして「形式」に注目したことから、言語の固有性や文化の違いを超えて、広くこの形式の規則が用いられるようになった。この形式の規則を記号化して用いると、東洋の思想も同じ原理を使って表し分析することができる。

<論理学の推論－演繹的推論と三段論法>

推論とは、すでに知られていることからまだ知られていないことがらを推理することを指す。すでに知られている「正しいこと」からまだ知られていないことがらを推理すること、つまり既知の真とされていること（大前提）から未知のことを推理する（結論を導き出す）ことを「演繹的推論」と呼び、論理学が扱うのはこの「演繹的推論」である。

「演繹する」とは、一般的、普遍的に正しいとされる大前提から、個別具体的な結論を得ることを指す。論理学の真骨頂は、既知のことがらを真と認めれば、そこから正しい形式の規則に従って未知のことがらが導かれるならば、その未知のことがらをも「論理的な必然」として絶対に正しいと認めなければならないことである。この原理に照らすと、命題は、真か偽かのいずれかであって、その中間やグレーゾーンはない。論理学を支えるこの原理があるからこそ、結論が論理的に正しいか間違っているかの判断が明確につくのである。

論理的に正しい結論を導く形式の代表的な例を見てみよう。演繹的推論の代表例である「三段論法」は、正しいとされる大前提と小前提の二つの前提から一つの結論を導き出す。

大前提「すべての人間は死ぬ」
小前提「アリストテレスは人間である」
結論「ゆえにアリストテレスは死ぬ」

これらの文章の関係を形式のみに注目して、以下のように抽象化して表すのも論理学の特徴である。

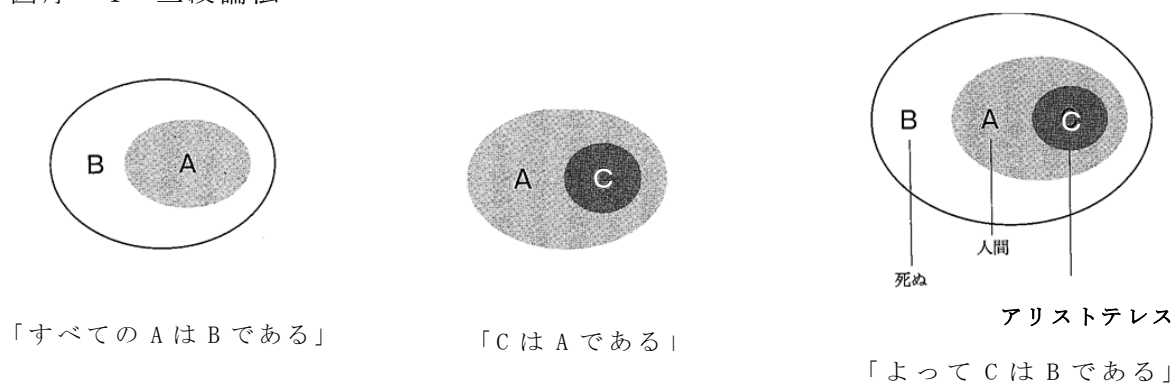
「すべてのAはBである」(A = 人間、B = 死ぬ)

「CはAである」(C = アリストテレス)

「よってCはBである」

ベン図を使うとより分かりやすい。

図序-1 三段論法



すべてのAがBであるならば、Aの部分であるCは、必然的にBとなるのは図序-1をみれば一目瞭然である。三段論法では、主語と述語の間に、「含み」、「含まれる」、つまり「全体」とその「一部分」とであるという関係が成り立つ。主語と述語の間の含み含まれるという関係だけを頼りに論理の法則を発見しこれを形式化したのが三段論法である。

この形式に従えば結論は必ず真になるはずだが、現実世界で結論が正しくなるためには、前提が正しくなければならない。たとえば、「すべての人間は鳥である。アリストテレスは人間である。ゆえにアリストテレスは鳥である」では、大前提が間違っているために、正しい形式に従っても結論は偽になる。

ここで「論証」と「導出」を区別することが重要となる。ある前提からなんらかの結論を導く、その全体を「論証」と呼ぶ。それに対して前提から結論を導く過程だけを取り出して「導出」と呼ぶ。導出の正しさは、「ある前提を正しいと仮定した時、その結論が必ず導かれるのか」という論理学の観点から評価されるのに対して、論証の正しさは導出のみならずその前提の正しさも保証されなければならない。私たちが学校で書く「小論文」では、「論証」することが求められている。しかし論理学が保証す

るのは、あくまで「形式的な正しさ」である。論理学は現実世界の検証には関わらない。論理学で扱うのは前提と結論の関係のみである。

<文の真偽に関わる言葉とは>

さて、演繹的推論という観点から見た時、文の真偽に働きかける言葉は限られている。演繹的推論の真偽に深く関わるのは、「ではない」という否定と、「そして」、「または」、「ならば」、「かつ」という接続詞である。これらに、「すべて」と「である（存在する）」を加えれば、一般的な論理学が扱う対象をカバーできる。

では簡単な例をもとに推論を形式化して、どのように真偽の判断を行うのか見てみよう。「太郎は家にいない」という否定文は、「太郎は家にいる」という文の否定であり、真偽の関係は以下のようにになっている。

「太郎は家にいる」が真ならば、「太郎は家にいない」は偽になる。「太郎は家にいる」が偽ならば、「太郎は家にいない」は真になる。否定（「ではない」）は、「ある文の真偽を反転させる働きをもった言葉」であり、文の真偽を問う論理学においては、非常に重要な言葉なのが見える。

ではこの観点を接続詞に応用すると、どんなことが言えるだろうか。先の例に倣って真偽表を作ってみると、接続詞でつながれた文の真偽が明らかになる。たとえば、「太郎は家にいる」が真で「次郎は家にいる」も真ならば、「太郎は家にいる、かつ次郎も家にいる」は真になるが、「太郎は家にいる」が真で「次郎は家にいる」が偽ならば、「太郎は家にいる、かつ次郎も家にいる」は偽となる。

これくらいの複雑さであれば、わざわざ真偽表を作るまでもないが、表を作ってひとつひとつの判断をたどることによって、接続詞でつながれたもっと複雑な文の真偽も明らかにすることができるのが分かるだろう。登場人物の数が増えたり条件が複雑になったりした時に、真偽表での確認は効力を発揮する。「ひとつひとつはあたりまえだからこそ、それを辿ることによって誰もがその結論を受け入れることになる」、つまりそこに「論理的必然性」に導かれた結論の正しさがある。

このように、論理学では、文の真偽判断に関わる部分のみを取り出して形式化するために意味を制限する。たとえば、ある状況で「Aではない」と正しく主張できるのは、その状況で「Aである」と主張すると間違っている時であり、論理学で扱うのはこの「純粋な否定」である。

しかし日常生活で私たちが何かを否定する時、そこには価値観や感情を含んだ意味が附随するが、論理学においては真偽決定の形式的な規則にあてはまらない「意味づけ」は扱わない。つまり真か偽かきっぱりと判断がつくことがらについてのみ形式を通して考え、それらの中間は考えない。また人間の観察の仕方によって真偽の判断が変わったり、観察のチャンスの有無によって影響されたりするような存在も取り扱わない。こうした制限を設けることで、論理学における推論は、言語の多様性にかかわ

らず、ひとつひとつは当たり前の論理則をたどることによって、誰もがその結論を受け入れることになるという普遍的な側面を手に入れた。

太郎は家にいる	太郎は家にいない	太郎は 家にいる	次郎は 家にいる	太郎は家にいる、 かつ次郎も家にいる
真	偽	真	真	真
偽	真	真	偽	偽
		偽	真	偽
		偽	偽	偽

＜論理学がすすめる思考法＞

こうした論理学の特徴は、厳密に考える癖を習慣づけることに役立つ。複雑なことからにはベン図を使って文と文の関係を確かめたり、真偽表を作ってステップを踏んだりして論理の道筋をたどって結論を導く。その時に直感や感情、常識や信念・価値観に頼らず、あくまで形式に従って慎重にステップを踏むことが求められる。どのようなステップを踏めばよいのか、前提になっていることは何かなどを厳密に考えるための基本的な「道具立て」を学べるのが論理学である。また記号を使って文の形式的な関係に注目させることは、抽象的な思考に馴染み、理論化することに注意を向けさせるため、学問的な議論や思考法に向く。

論理学では、複雑な文章はそれを成り立たせている判断（＝命題と呼ばれる文章）に分けて、それらの間の関係をひとつひとつたどることで結論の真偽を明らかにする。この方法は、複雑な問題や現象をまるごと全体として捉えるのではなく、それをできるだけ単純な要素に分解して、この単純な要素の確実な知識から出発し（ここまでの作業が「分析する」ということである）、もう一度複雑なものを構成することをすすめる。全体を部分に分けること、そして理解可能な部分から全体を再構成することで、「全体」についての理解を深め、解決の手がかりを得るのである。

論理学が厳しく戒めるのは、推論を行う時には曖昧な言葉遣いをしないことである。たとえば、三段論法は三つの判断から成り立ち、先の例では、「人間」、「アリストテレス」、「死ぬ」という三つの概念が用いられている。しかし、この三つの概念のうち一つでも異なった意味で用いられていたり、二つの解釈が可能だったりすると、実際には三つの概念ではなく、四つの概念が用いられていることになり、三段論法が成り立たなくなる。曖昧な言葉や表現を使っていくら推論しても、正しい結論にはたどり着けないのですべての努力が徒労に終わってしまう。命題の中で用いられる概念は同じ意味で使われなければならない。

論理学が注意を喚起するのは、「すべての」、「あらゆる」、「何も○○ない」、「誰一人○○ない」などの、述べられたことがらが適用される範囲や程度を示す「数量詞」と呼ばれる言葉の使い方である。日常では、「大人は皆嘘つきだ（＝すべての大人は嘘をつく）」とか、「日本の（すべての）街にはゴミひとつ落ちていない」と言うが、嘘つ

きでない大人やゴミの落ちている日本の街の反論をひとつ持ってくれば、これらの主張は間違っていることになる。全体を表す言葉を軽々しく使うことは、議論する時に墓穴を掘ることになりかねない。

このように使用する概念をあらかじめ定義して一貫してひとつの意味で使うこと、接続詞や数量詞に敏感になることなど、言葉の定義や言葉と言葉の関係に注意し、場当たりの言葉を使用しないこと、具体的なもの／ことよりも議論の過程を示す抽象的な形式に気を配ることを論理学はすすめる。思考する時には、矛盾や飛躍のないように前の文と後ろの文、前提と結論の関係に注意し、慎重に「すり足」で進む思考法を心がけることを論理学は喚起する。

では論理学の思考法は日常の実践にどう役立つのだろうか。たとえば、事実をひとつひとつたどることによって「ありえること」と「ありえないこと」を峻別して法廷でのアリバイを崩したり、複雑な条件の上に成り立つ約束が実際に履行されたのかを確かめたり、列車が衝突しない運行スケジュールを組み立てたりできる。

また「 p ならば q 」が真であっても、その逆である「 q ならば p 」は必ずしも真にならない規則（後件肯定の誤謬という）を知っていれば、「原因→結果」の関係がたとえ真であっても「結果→原因」は常には真にならず、他の原因も考えられ得るという慎重さを身に着けることができる。

先の真偽表からも分かるように、論理学においては必然的に起こり得ることと起こり得ないことが明確に分かる。そうであるので、不可能と決まっていることを望んだり、科学的な法則のように未来の必然的なコースが決まっている場合には、そうでない可能性を考えても無駄であるのでやめよう、ということも論理学が提案するところである。

説得（レトリック）の論理

＜レトリックとは何か＞

レトリックの目的は、人を説得することである。人を説得するための証拠立ての方法と議論の型を考え、「説得のための言語技術を体系化したもの」がレトリックである。

論理学の形式論理によって結論の真偽は決定できるにもかかわらず、なぜレトリックという別の学問が必要なのだろうか。 アリストテレスは、自ら作り上げた論理学の体系が、日常の思考や議論ではほとんど役に立たないことを認識し、日常で使える論理の体系を作り上げた。論理学における「演繹」（一般的・普遍的な前提から個別・特殊な結論を得る推論の方法）と、その逆の手続きをたどる「帰納」（具体的なことから一般的に通用する原理や法則を引き出す推論の方法）に対応させて、人々の常識を前提とした、常には正しくはないが、多くの場合に正しい「蓋然的推論」と、類似した事例で証拠づける「例証」による全く新しい「実践的論理学」、つまり説得のための論証の方法を提示した。レトリックは常識を基盤として、一般大衆に向けて説得的

な弁論を行うための技術なのである。

アリストテレスはレトリックを「どんなことがらに関してでも、可能な説得手段を見つける能力」と定義し、①説得するための証拠立てをどのように得るか（発想）、②説得するには弁論の諸部分をどのように配置したらよいか（配列法）、③効果的に説得するためにはどのように表現したらよいか（修辞／表現法）を三つの課題とした。

レトリックは、人を説得する技術であるので、「理性（ロゴス）による論理的な説得」のみならず、話し手の「倫理（エトス）」と受け手の「感情（パトス）」をも視野に入れている。倫理（エトス）とは、弁論者が信用できる人物と受け手（聴衆）に認識されると弁論の説得力が増すため、弁論者が弁論を通じて受け手に信頼に値するとイメージさせる術である。弁論者の人柄、徳、思慮、そして受け手への好意が説得の強弱を決定する条件となりえるため、これらを考慮して議論を行う。

< 中略 >

受け手の感情（パトス）に訴える説得は、現実には論理的な説得よりも効果的である場合が多い。物的・経験的証拠を突きつけた理詰め（ロゴス）の説得が相手の主張や前提を叩きのめして納得させるのに対して、感情による説得は蜜で誘い出すように快くその気にさせ得心させる。これらのことは私たちが日常でなんとなく感じていることだが、アリストテレスは、「理性（ロゴス）」、「感情（パトス）」、「倫理（エトス）」の三つの領域に分けて説得の技術をそれぞれ分類し体系化した。日常の実践的論理は、この体系化によって、単なる経験や熟練を超えた「理論化された知識」となり、西洋の伝統となり得たのである。

< 説得するとは >

説得するとは、受け手の心からの同意を引き出し、言論によって受け手の考えや行動を変えることである。人に理解させ、人を信じさせ、人を動かすのが説得である。この時、圧力や権威によって強制的に同意を引き出すのは説得とはいわず、あくまで話し手／書き手の「言葉」によって受け手が自発的に賛同して考えを変えることを指す。

レトリックは、人々の同意を求めてなされるあらゆる種類の議論を対象とする。論理学の大前提のように、議論の余地がなく明白に正しいことがらではなく、なんらかの疑いがあったり、問題視されていたり、判断が分かれるような性質の主張を扱い、その主張の確かさの根拠を列挙する類いの議論である。したがって、常に反論が予想されるため、反論を見越した議論を行うことも重要である。

また説得する相手によって、主題によって、場面によっても効果的な説得の方法は異なる。この点がいつでもどこでも誰にでも、真偽がひとつに決まる論理学の論理と、

説得のための論理が大きく異なる点である。

< 日常の論理 >

レトリックにおいて重要なのは、「日常の論理」である。日常の論理を支えるのは、論理学の演繹的推論に対応させた「蓋然的推論」と、帰納に対応させた「例証」である。「蓋然的推論」の前提となるのは、人々の「常識」あるいは「通念」とも呼ばれる社会一般に共通して認められている考えである。蓋然知とは常識のことを指し、人々の日常生活の行動の規範であり、判断の拠り所でもある。また「蓋然的」とは、「必然的」の対義語であり、ある程度確実なこと、起こる可能性のあることを指す。疑わしいもの（偽）と必然的なもの（真）の中間にある。説得推論の真実らしさは、計測可能な蓋然性（確からしさの確率）とは異なる質的なものであり、「道理がある、もっともだ」の意味である。論理学的、科学的な確実さではなく、人間的な確実さ、社会的な確実さといえる。

常識も通念も人々が当たり前のこととしているだけに漠然としており、時代や社会によっても異なるものだが、アリストテレスは、蓋然的推論を構成する原理を28種類に分類した。たとえば、香西秀信がアリストテレスから引用した分かりやすい例は、「相反するものに基づいて論じる」型式である。この型式では、ある状況から不利益を受けているのであれば、それと反対の状況からは利益を受けるだろうと推論する。どのような場合にでも必然的に真となるものではないが、私たちは日常こうした「蓋然的推論」を使って思考している。常に確実に正しくはないが、「多くの場合において正しい思考法」である。

「帰納」に対応する「例証」は、帰納のように個々の事実から一般的な原則を導き結論とするのではなく、具体的な事例からそれに類似した他の事例に移行して主張を根拠づける。たとえば、「現在取り上げている＝起こっているこのことがらは、過去に起こったこの事例と類似している。過去の事例においてはこのような結末となった。よって現在起こっているこのことがらも同じ結末となるだろう」と推測し結論づける。

< 中略 >

< レトリックにおける〈論理的思考〉－論理学との対比から >

論理学では、文と文の関係を形式的に取り出すことで、文脈や価値観に左右されずに推論の形式から結論の真偽を決定する。それに対して、レトリックが扱うのは価値判断である。価値判断とは「事の優劣、適否、理〔道理〕の有無に関する推論」である。レトリックとは、ある主張への人々の同意を求めてなされるあらゆる種類の議論そのものであるため、そこには、何を優先すべきか、どこに道理があるのか、目の前の状況に対して何をすることが適切なのかの判断が示されている。その判断を主張と

して人々を説得するものである。したがって、レトリックで扱う議論は、論争を避けられない議論であり、その結論は必然的性質を持つものではない。必然的性質を持つ論証にするには、用語を正確にして、あらゆる曖昧を排除して多様な解釈の可能性を一切取り除かなければならないが、日常で使用する言語でそれを行うのは至難の業であり、ほとんど不可能である。レトリックは、そのような学問的に厳密な議論へ向かわず、むしろ他人を言葉で動かす技に力を注ぐ。

たとえば、議論の「長さ」と議論の各部分を述べる順番（「配置」）は、論理学では真偽の判断に関係しないため取り上げられないが、レトリックにおいては議論の「強さ」に大きく影響する。多くの場合、聴衆も読者も長い議論は好まない。分かりきった前提を述べるのは受け手を飽きさせるだけである。そのため日常では、すでに常識とされている「大前提」は述べて議論を進めるのが一般である。レトリックで、大前提を省いた「省略三段論法」が用いられるのはそのためである。三段論法の例で挙げた「すべての人間は死ぬ」は自明なこととして省略される。

その一方で、大前提が聴衆に受け入れられるかどうかは、まず確かめなければならない。聴衆に前提をはっきりと思い出させ、前提の意味や適用の範囲を明らかにすることは、議論を有利に進めるために必要である。この前提が、レトリックの場合には蓋然的推論の型式から選択され、前提の「真実らしさ」をつくる。分析のために行われる抽象的演繹とは逆に、受け手に調子を合わせて展開されるレトリカル（修辞学的）な三段論法である。

レトリックの例証でよく使われることわざは、ことわざ同士では矛盾するが、使う文脈によっていずれも正しくなる場合がある。たとえば、「渡る世間に鬼はなし」と「人を見たら泥棒と思え」は、意味の上では矛盾し、いずれも常に正しいわけではないが、それらを使う場面や状況によって適切な根拠となりえることは、私たちが経験から知っていることである。つまり話し手／書き手の目的に沿って引用されればよい。しかしこのように文脈に真偽が依存することは論理学では許されないことである。論理学が言語の閉じたシステムの中で、システムを支える「規則」をもとに展開する制約があるのに対して、人間の行為は「必然的に帰結するものは一つとしてない」、いかようにもなるものだからである。

<レトリックがすすめる〈論理的思考〉の型>

レトリックは、長年の経験の蓄積から抽出した「論証の型」を学び、そこから時と場合に応じて選択することをすすめる。なぜなら、私たち人間は何もないところから自由に考えているわけではなく、使い慣れた型を用いて議論したり人を説得したりするからである。共有された型を用いるからこそ、他人を説得できるともいえる。ただ闇雲にひたすら考えても、人間が一生の間に考え出せることは限られている。レトリックは、さまざまな議論の観察から発想の型を抽出し類型化したものであり、そこに

は長い歴史の蓄積がある。アリストテレスが類型化を行った紀元前四世紀においてすら、説得弁論の技術はすでにそれなりの厚みと広がりをもって存在しており、先人の功績の上に立ってアリストテレスも体系化を行えたのである。

アリストテレスが論証の型を網羅的に分類したのだから、人はそこから取り出すだけでよい。ここには確立した方法に対する確固とした信頼感と、行き当たりばったりの自然発生的な無方法は何ももたらさないという確信がある。レトリックの「発想」の基本的な考えは、論じる方法は個人が工夫して創造的に作り上げるというよりは、馴染みのパターンからすでに抽出された弁論／論証の「型」を素材の上に被せるだけで卓越した弁論／論証ができるということである。

レトリックは、論理的思考を思考力という「力」としてではなく、「量」として捉える発想の転換を促すと香西は述べている。つまり思考力を養うには、まず私たちがよく使う議論の発想の型を大量に覚えることから始めることをすすめる。過去の経験を情報として蓄積することで、その場に最もふさわしい議論の型式――先に述べた「相反するものについて論じる」型式はその一例である――を選び、それに当てはめて主張を「論拠づける」のである。

さらに故事や寓話、伝承された物語、比喩を使った話などは、主張したいことがらの具体的な結末を示す「根拠づけ」の宝庫であるためストックしておく例証する時に便利である。学んだ基本型が多ければ多いほど選択肢が増え、それらの組み合わせの可能性も広がる。議論／論証に関するレトリックの知識は、思考の「引き出し」や選択すべきメニューとなる。基本型を使いこなして場数を踏めば、あらゆる場面において効果的な議論が行えるようになる。とりわけ相手とのやり取りによって議論する場合には、「好機を失うことなく」論拠を適切に配置することが可能になる。その場と聴衆に合わせて同じことがらをどのような長さでも、どのような順番でも、そして理性、感情、倫理のどれを軸としてでも議論することができる。ある現象は、原因としても結果としても叙述することができ、手段としても目的としても、全体の象徴としても目標への過程としても叙述することができる。つまり話し手／書き手の目的（主張）に応じてどのような枠組みも使える。その一方で、そうであるからこそ、そのうちのひとつを選ぶことは、それ以外の解釈を覆うことにもなる。レトリックの技術の蓄積から学べることは、何を選んで説得しているかのみならず、覆われているものは何かにも敏感になれることである。

レトリックにおける〈論理的〉な思考とは、「説得」という目的を達成するための戦略的な思考といえる。時と場合によって、つまり話し手／書き手の目的に応じてどのような手段がありえるのか、どのような操作を行ったらよいのかの実践的な効力を持つ論拠と論法の集大成がレトリックだからである。ここで戦略的な思考を個人的な利益のために使えば「利己的な戦略」に終わる。しかし、政治的判断や道徳に関わる議論など、集団や社会の運命を決定する大切なことがらについての「慎重な判断」を大

衆に理解させるための「利他的な戦略」としてレトリックを使うことも可能である。
古代ギリシア・ローマの社会において高く評価されたのは後者であった。

<以下略>

渡邊 雅子『論理的思考とは何か』（岩波新書、2024年）より抜粋。
出題との関係で必要な補足、省略、変更を施している。なお、<中略>および<以下略>は出題者による。

2026 年度入学試験 出題趣旨・解説・講評

【B 日程：論文】

《出題趣旨》

「論理的思考とは何か」につき、論理学とレトリックを対比して論じる文章を素材として、論旨を正確に理解・要約・表現する力を試すものである。

解答例

〔設問 1〕

論理学の論理は、「AはAである」、「Aと非Aは同時に成立しない」、「Aであるか、またはAではない」という3つの原則を立て、これらに反する場合を矛盾と判断することで命題の真偽を決定するものである。文と文との関係につき、内容ではなく形式に注目することによって結論の真偽を判断できることから、言語の固有性や文化の違いを超えて用いられる。論理学により、一般的、普遍的に正しいとされる大前提から、個別具体的な結論を得る演繹的推論が可能になる。これに対し、説得（レトリック）の論理は、説得のための言語技術を体系化したものであり、理性（ロゴス）による論理的な説得のみならず、話し手の倫理（エトス）と受け手の感情（パトス）をも視野に入れている。人々の同意を求めてなされるあらゆる種類の議論を対象とし、蓋然的推論と例証による「日常の論理」を用いる。価値判断を扱い、その結論は必然的性質を持つものではない。故事や寓話、伝承された物語、比喩を使った話などが例証の根拠として用いられる。個人的な利益のための「利己的な戦略」のみならず、集団や社会の運命を決定する大切な事柄についての「利他的な戦略」として使うことも可能である。（500字）

〔設問 2〕

論理学の論理は形式論理であり、明確に真偽を決定できるものだけを対象としているため、日常における価値判断を含む議論には適用できない。また、厳密な演繹的推論と帰納による論理学よりも、人々の常識を前提とした蓋然的推論と例証によるレトリックの方が、受け手の感情（パトス）に訴えることができ、高い説得力を持ちうる。さらに、議論の長さや配置（議論の各部分を述べる順番）は、論理学では真偽の判断に関係しないため取り上げられないが、レトリックにおいては、議論の強さに大きく影響するため、重視される。たとえば、すでに常識とされている大前提は省略される一方で、議論の前提として受け入れてもらう必要性の高い大前提は、例証を用いて強調される。このように、論理学はレトリックの基礎にはなっているが、論理学のみでは適用範囲が狭く、感情をもつ人間に対する説得力も高くないため、レトリックが必要とされると問題文の著者は考えている。（399字）

《解説・講評》

問題文はやや長文であったが、論旨を大きく外したり、途中答案になったりした答案は少なかった。

他方で、問題文の理解が不正確と見られる答案は多かった。問題文では論理学の「演繹的推論・帰納」とレトリックの「蓋然的推論・例証」の対比が重要な軸となっているが、レトリックの説明として「蓋然的推論・例証」に触れず、単に「常識に基づく」等とする答案が多かった。

設問 2 では、上記解答例にあるように、適用範囲の広さ（価値判断が必要な社会的課題を含む）とともに、形式論理だけでは説得されない人間の性質・限界に触れる必要があるが、どちらか一方のみに重点がある解答が多かった。論理学とレトリックとの関係性について、前者は後者の前提にあることに触れた答案は少なかった。

なお、設問 2 では、「なぜレトリックという別の学問が必要なのだろうか」という問いに対する問題文の著者の見解が聞かれているので、単に論理学とレトリックの違いを説明するだけでなく、上記の問いに答える形式となるように注意してほしい。

以 上